

■ 市長から市民のみなさんへ

市長 白井 博文



■ 「対話の日」が終わります

1 期目の公約の一つとして、「対話の日」を開催することを約束しました。

平成 17 年 7 月、埴生・福田での第 1 回目から始まり、今年 11 月の市役所大会議室での最終回まで、7 年半にわたって、実施回数は定例と随時を合わせると 115 回、参加者は約 3,500 人にのぼります。毎月 1 回は、原則、小野田と山陽の二つの地区で交互に開催してきました。常に国民から一定の距離を置くことを職業上のモラルとしていた前職とは全く逆に、市民の中に入っていかないと、そもそも市長の仕事は務まらないという自覚に立っての公約の実行でしたから、開始当初は大変新鮮で、当日が来るのがとても楽しみでした。会場は公民館もあれば、各地の集会所や公会堂など。まず私から市政の現状を説明し、参加者の質問を受け、また、地域の問題や課題を聞き、様々な要望を受け、どこに出掛けても宿題を持って帰る。大体、これがパターンでした。当初は、参加者ともども、あぐらで車座。それがお互いに年を取り、そのうちにテーブルと椅子に代わりました。椅子は楽ですね。当初の数年は、市長の側は私一人が出席し、市政の現状を知ってもらおうとする想いから、長々としゃべりすぎ、後日、批判の手紙をいただいたこともありました。出席者の年齢を考え、途中で 1 年近く、“病氣知らず、医者いらす”の市内に住む 70 代後半の男性に同伴をお願いし、「対話の日」の冒頭、日々の工夫や努力の様子を語ってもらった時期もありました。同行してくれた病院局長の講話「健康に

ついて」もしばらく続きました。2 期目に入ると、現在の副市長がいつも随行してくれ、約 40 年の実務経験に基づき、随分有益な発言で、私を助けてくれました。出席者は 1 会場に 30 から 40 人くらいが多かったでしょうか。質問やご意見が市政全般におよぶこともありましたが、やはり地元や地域に関する話題が多かったように思います。私の知らないことが結構多くて、即決で約束できることもありましたが、財政の非常に難しい 1 市 1 町の合併であっただけに、「それは無理です。」とか、「年次計画を立ててみます。」などの返事も多く、十分、出席者の期待に応えられなかったのが残念で、つらい思いをしたこともしばしばでした。いろいろな知恵や助言をいただき、行政の新米の私には随分助けとなりました。市全域を回るわけですから、回答にブレがないように心がけました。それが結果として、情報の公開性、透明性を担保することになったと思います。

“市民あつての市役所” “私たちは市民から給料をいただいている” この意識は市役所の中に随分と浸透してきたと思います。「市民には優しく親切に」これが私の座右の銘です。「対話の日」で学んだことが、私の市政を支えてくれたようなもので、ご協力いただいた市民のみなさんには心から感謝を申し上げます。

これからも、市長への手紙、市長室への訪問等々、今までどおり扉は常にかいていますし、必要が生じたときは地域にお邪魔して、みなさんとのコミュニケーションを大切にしたいと思っています。